

2011年度 第16回「音の匠」

みつはし きふう
三橋 貴風氏（尺八奏者）のご紹介

「音の日」実行委員長
森 芳久

「音の日」は、彼のトーマス・エジソンが世界で初めて円筒式錫箔蓄音機「フォノグラフ」を発明した1887年12月6日にちなみ、1994年（平成6年）日本オーディオ協会が日本レコード協会、日本音楽スタジオ協会などと手を携え、音と音楽文化の重要性を広く認識してもらうと共に、オーディオおよび音楽文化・産業の一層の発展に寄与することを目的に、このオーディオ誕生の日ともいえる12月6日を記念して制定いたしました。

さらに、1996年より「音の日」の行事のひとつとして、音を通じて技術や文化に貢献した方々を「音の匠」として顕彰し、広く一般の方々に素晴らしい音の世界を認識していただくべく活動を続けてまいりました。

2011年度「音の匠」の顕彰も早くも第16回となりましたが、今回は尺八奏者、三橋貴風氏を顕彰いたしました。

1950年東京都出身の三橋貴風氏は、尺八界の第一人者として、国内はもちろん海外でも活躍され、また文化庁芸術祭大賞をはじめ数多くの受賞をされています。

特に1992年には、当日本オーディオ協会の初代会長であり、昭和の文化人と称せられたフランス文学者、中島健蔵氏を記念して創設された中島健蔵音楽賞を受賞され、昨年秋には紫綬褒章を受章されました。

世界的尺八の名曲といえば武満徹作曲「ノベンバー・ステップス」ですが、岩城宏之氏は自分の指揮でこの曲を演奏した三橋氏を「これからは、このメンバーで再演をして行きたい」と評したほどです。

現在、琴古流尺八大師範、琴古流尺八貴風会家元として、国内海外の演奏活動はもちろん、日本文化の紹介、国際交流などにも大いに貢献されています。

また、三橋氏は尺八の普及活動、後進の指導にも熱心に取り組み、小中学生や初心者の人たちにも手軽に尺八の魅力を知ってもらえるよう、本物の尺八の音を安価に提供する楽器作りについても研究を重ねて来られています。

その中で、画期的な楽器を発明されたのです。それは、どこでも入手できる塩ビ管（水道管な



・「音の匠」三橋貴風さん

（左）電波新聞社平山社長（右）校條会長

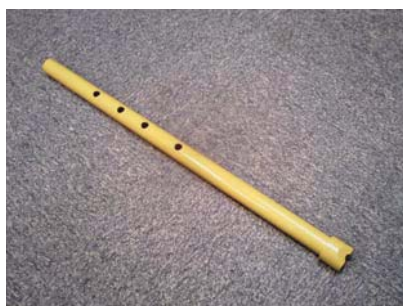


ノブレ管を演奏する三橋貴風さん

ども用いられているものと同種のもの)を特殊加工することにより、本来の尺八の持つ複雑で深みのある音を再現することでした。

氏は、竹の持つ本質的な物性と音の関係を調べ、ある結論に到達しました。竹は外部が硬く、内側になるにしたがい軟らかくなっている。つまり、竹の独自の音は竹の断面の粗密にあるのではないかということです。ならば、塩ビ管の外側を硬い皮膜にする、または硬い塗料を塗布することで竹に近い音を出せるのではないか。そこでいろいろな試行錯誤と実験が繰り返され、特殊塗料が完成しました。この成分については企業秘密ということですが、氏のお話によれば特殊な金属を混ぜた塗料ということですが。

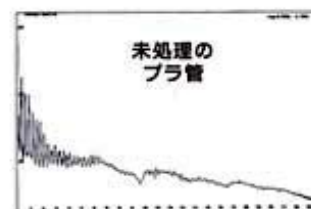
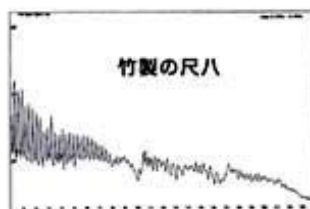
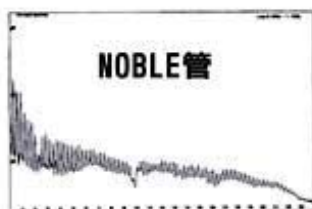
こうして完成した塩ビ管の尺八は、本物の竹に近い音が出せるようになり、安価に尺八の音色が楽しめる楽器が登場することになりました。この新しい楽器の名称は「NOBLE管(ノブレ管)」と名付けられました。語源は氏の名前の貴風の「貴い」を意味するスペイン語の「NOBLE」から来しているとのこと。確かに、スペイン語の Noble は英語の Noble、NOBLE 管=貴い管楽器、まさに言いえて妙です。この楽器は特許製品となっています。



NOBLE 管 (注1)



竹製の尺八 (注1)



実験日：2003.03.03

周波数スペクトラムの比較 (注2)

今回の「音の匠」の顕彰理由は、三橋氏の「NOBLE 管」の一連の開発研究に加え、小・中学生、初心者など多くの方々に「NOBLE 管」を通じて尺八の持つ魅力を伝えてこられた功績によるものです。ここに改めてお祝いを申し上げ、今後のさらなるご発展と日本の古典芸能の伝承普及をお祈りしたいと思います。

(注1) NOBLE 管、竹製の尺八画像は、三橋貴風～尺八の世界～

<http://jukumitsuhashi.music.coocan.jp/kifu/index.html> より転載。

(注2) 周波数スペクトラムの比較図 東京都市大学(旧武蔵工業大学)環境情報学部 宮坂榮一教授が同大学無響室で測定した比較図。演奏者は三橋貴風さん。